指示と数量詞

(2)

作用域と島制約

福沢　清

0.　この小論では，数量詞（Quantifiers 以下 Q）の作用域と島制約（Island Constraint）[1] との関係について議論がなされる。Rodman（1976）や May（1977）などの主張によると，Q の作用域は，上記の制約，とりわけ，複合名詞句制約（Complex NP Constraint 以下 CNPC）に統率されるということであり，また Liberman（1974）によると，否定の作用域も当該否定辞の含まれる文(=節 clause) ないしは文相当語句の内部に限られる，と論じられている。このような主張を「作用域の単一文内制約」と呼ぶことにして，以下この制約の妥当性について議論を展開することにする。（否定の作用域については稿を改めて論じるつもりである。）

1.0.　Qを先行詞である主要名詞句とその関係詞節内に含む構文において，その相対的な作用域は主要名詞句内のQが関係詞節内のQよりも広い作用域をとる，と一般に主張されている。このことは，この構文がwh-語で導かれるSを含む複合名詞を形成しており，したがってその中の要素が外の要素に影響を及ぼすことができない，という具合に説明される。いわゆるwh- island制約というものである。[2] 具体例をみてみよう。（>は左側の要素がその右側の要素よりもその作用域が広いことを示す。）

(1) a. *Every*one who bought *an* Edsol got a lemon.　(every>an)

b. John defeated *some* politician who runs in *every* election.
(some>every)

c. Guinevere has *a* bone in *every* corner of the house.
(ambiguous)

d. Guinevere has *a* bone which is in *every* corner of the house.
(a>every)

(1)aは，Edsol という車を買った人はみなポンコツ車をもったことになる，ぐらいの意味であるが，いま問題にしているのは everyone の数だけ Edsol が買われたということである。つまり，不定冠詞 a(n) が every の影響をうけて複数を含意する，という事実である。これを every は a(n) より広い作用域をもつという。(1)bも関係詞節内のQが先行詞のQより狭い作用域をもつという点で (1)a と同じで，あらゆる選挙に立候補するある特定 (particular) の政治家(屋) を John が打ち負かした，という読みである。(1)c，dは Farkas(1981) の用例であるが，(1)d は(1)b同様，特定の一本の骨をもっていて，その骨は家の隅っこのどこにでもある，という読みしか言語学的には許されない。が，この読みは現実的には存在しえない読みである。(1)cは，この (1)dの読みに加えて，家の隅っこの数の分だけ骨が存在する every>a の読みもあり，この読みは現実界と照合しても意味をなす。[3] 以上の事実は「単一文内制約」で説明可能なものである。(1)はcを除き，すべて wh-語で始まる文において，その内部の要素がその外の要素に影響を及ぼさない，という例であるが，関係詞化や疑問詞化などの統語的操作においても同様の現象が観察される。

(2) a. **Who* did you see the girl who helped ϕ?
b. **That man,* nobody knows anyone who likes ϕ?
c. **Stupid* though Fido bit a man who was ϕ, everyone blamed the poor dog for the lawsuit.
d. *I met *the man who* Mary saw the boy who hit ϕ.
e. *It is *beans* that John knows a man who doesn't like ϕ.
f. **What* John knows a man who doesn't like ϕ is beans.

この現象は，前にも触れたように，一般に wh-island 制約と呼ばれているものである。[4]

1.1. しかしながら，(1) のような例と異なって単一文内制約，とくにwh-island 制約に違反，もしくはそれによって予測できない読みをもつ例がある。

(3) のa-dは May(1977)，e-jは Farkas(1981) によるものである。

(3) a. *The* woman who *every* Englishman loves best is the Queen.
b. *The* woman who *every* Englishman loves best is his mother.
c. *Every* man who loves *a* woman loses her.
d. *A* book which *every* prisoner left surprised the warder.
e. John bought *every* book that was published by a publishing house in New York.
f. John dates *every* girl who knows *a* diplomat in Washington.
g. John gave an A to *every* student who recited *a* difficult poem by Pindar.
h. Mary dates half the men who know a producer I know.
i. *Each* student has to come up with *three* arguments which show that *some* condition proposed by Chomsky is wrong.
j. *Every*body told *several* stories that involved *some* member of the Royal family.

(3) a, b の the は関係詞節の限定による，いわゆる後方照応の定冠詞と考えられるので，根底にある構造では不定冠詞 a に相当すると見做してよいと思われる。しかし，(3) a の the は特定的で，したがって，この読みは the>every であるのに対し，(3) b は曖昧である。この差異を生みだしているのは述語の意味内容である。いま (3) b の his を Englishman の照応語であると仮定すれば，every>the (=a) となる。が，この his を直示的 (deictic) な用法と見做せば the>every となる。(3) a が the>every となるのも the Queen が唯一的に特定の女王に言及しているためと思われる。(3) b の every>the の読みはQの単一文内制約では予測できないもので，wh-島制約を破る読みである。(3) c も曖昧である。ひとつの読みは，「ある女性をどんな男性が愛しても，結局は，その女性を獲得することができない，そういう特定の女性がいる」，という a>every の読みで，もうひとつの読みは，「女性なら誰をも好きになる男性はすべて，その人が愛するどの女性をも失う」ぐらいの意味になる every>a の読みである。前者の読みが単一文内制約に抵触する。(3) d-h も同様に曖昧であるが，d，e についてのみ (4) にその両義をパラフレーズする。i', j' は (3) の i, j の優先する読みである。

(4) d'. i) for *each* prisoner, there is *some* book which he left, which surprised the warder. (every>a)

ii) there is *some* book which *all* of the prisoners left, and it surprised the warder. (a>every)

e'. i) John bought *all* the books published by *some* particular publishing house. (a>every)

ii) John bought *every* book such that *a* New York publishing house published it. (every>a)

i'. *Each* student has to pick *some* condition and come up with *three* arguments showing that that condition is wrong. (each>some>three)

j'. *Every*body picked *some* member of the Royal family and told *several* stories about him. (every>some>several)

(4)d'i), e'i), i', j' の読みはいずれも単一文内制約では捉えられない読みである。このような読みはいかなる原理によって導くことができるのであろうか。

1.2. この点に関連して，上記 Farkas は（5）のような制約を提案している。

（5） every はそれが統御していない不定名詞句より広い作用域をもつことができない。 (Farkas *ibid* 91)

この制約の根拠となっている例から観察してみよう。（6）は（7）が示すように，統語的には島を形成しない。that に導かれる従属節の中の要素を疑問詞化や関係詞化によってその外に摘出できるからである。

(6) a. *A man* said that John loves *every woman in my class.*

b. Dr. Johnson told *a nurse* that she should be in *every ward* at exactly 5 p.m.

c. John told *a friend* that Peter is going to marry *every girl* in his class.

(7) a. *Who* did a man say that John loves φ?

b. *Where* did Dr. Johnson tell *a nurse* that she should be ϕ at exactly 5 p.m.?

c. That's *the girl* that John told *a friend* that Peter is going to marry ϕ.

したがって，この統語的事実だけに基づくと（6）には単一文内制約は適用できないと考えてよいように思われる。が，（6）の読みは，すべて，a>every であり，every は従属節文内に留まっている。もっというなら，次の（8）の各組のaは，その that 節内から要素を摘出できるので島を形成しないのに対し，bは，それぞれ複合名詞，that に導かれる文主語なのでその中の要素を外へ摘出できない。つまり，bは島を形成しているのである。ところが，この対照はその解釈には反映されず，いずれも a>every の読みである。この（6）-（8）のような事実を説明するために仮定されたのが（5）である。

(8)(i) a. *A man* claimed that he was in *every room* at 5 p.m.

b. *A man* made the claim that he was in *every room* at 5 p.m.

(ii) a. It seems obvious to *a friend* of mine that John loves *every woman* in his class.

b. That John loves *every* woman in his class seems obvious to *a friend* of mine.

一見したところ妥当であると思われるこの(5)は，しかしながら，関係詞節内の every が先行詞のQより広い作用域をもつ既述の（3）b，dのひとつの読みが反証となる。さらに，主要名詞＋前置詞からなる名詞表現のいずれにもQを含む構文の通常（自然，無標）の読みでは，前置詞句内に含まれるQの方が広い作用域をとるが，この事実も(5)は説明できない，という欠点をもつ。

(9) *Some* toys in *every* store are defective. (every>some)

（5）で言及されているのが every に限られていることも，一般化という観点からみれば(5)の価値を減じている要因になっている。

（5）が不十分であると思われる例として，非定形関係詞節の例があげられる。(10) は曖昧であるが，このひとつの読み every>a は（5）によれば予測されないものである。(10) は (10′) の読みをもつ。

(10) This hospital provides *a* TV for *every* child to watch.

(10′) i) *Every* child has his own TV. (every>a)

ii) There is *one* TV for *all* the children. (a>every)

ここで急いで注釈したいのであるが，私は「関係詞節内のQよりも，通例，その先行詞のQが広い作用域をとる」という主張を，今まで挙げてきたような反例があるからといって否定しさるつもりはない。この主張は無標の読みとしてはむしろ自然な読みであると思われるからである。(11) はその典型的な例の一部である。

(11) a. John dated *a* woman who loves *every* man. (a>every)

b. John dates *every* woman who loves *a* fish. (every>a)

c. *some* boy who *every* girl kissed = *a* single boy such that *each* girl kissed him

d. *every* girl who kissed *some* boy = the set of girls such that for *each* one there is *some* boy she kissed

有標な場合には特定的でない名詞句も広い作用域をとることはあるにせよ，[5] 無標の場合，作用域の広い名詞句は特定的である。なぜそうなるかというと，広い作用域をとる名詞句は，共通して，ある一定の収斂（しゅうれん）した意味内容をもっているわけだが，その集束する一点というのがまさしく制限関係詞節の先行詞となるからである。

そうすると，これまで単一文内制約に抵触する（3）のような読みは有標な読みということになるが，これを引きおこす要因は，特定性ということに結びつくものであるが，i) 叙述語の唯一性（cf. 3 b），ii) Qを含むNP の

関係詞節内における文法的位置，例えば主語（cf. 3 d），iii）前置詞句による限定（cf. 3 e, f, g），iv）形容詞による限定（cf. 3 g），v）関係詞による限定（cf. 3 h），（vi）埋め込み（cf. 3 i, j），（vii）不定冠詞 a(n)（cf. 3 c）－これは love という行為の向けられる集点にもなっている－つまり，Qの固有の内在的特性，などであると思われる。この最後の点に関連して，既述の（5）から every は a(n) より広い作用域をもちにくいということになるが，これは every が個に言及する点は不定冠詞と同じであるが a(n) と異なり１人(個)ずつという集束しない意味特性－〔+ Distributive〕な意味－を固有にもつことと無縁ではないと思われる。特定的性質を獲得しやすいのは a(n)の方であると思われる。[6] しかし，これが絶対的でないことは既にみたとおりである。[7]

ここまでのところを整理してみると，Qの相対的作用域に関し，wh-島制約の単一文内制約に従うのが無標であり，そうでない読みは，談話上の制約や現実界の実情などの関与する[8] 有標なものである，という指摘である。（12）は特異な語い項目の存在により関係詞節内の要素が広い作用域をもっている例である。

(12) John dates *every* woman who loves *a certain* fish.

要約すると，有標な読みの場合は，「特定化」を指示するなんらかの要因が必要とされるということである。

2.0. 1.2節の（8）(i)(ii) のａの文は，ともに主要語をもたない that 補文内の要素であるQがその外のQより広い作用域をもたないことを示す例で，これは単一文内制約で説明されるものである。本節では，この複合名詞句を形成しない that 補文内のQの作用域の問題について論じる。

2.1. Farkas（1981）は上述のような例を根拠に（5）のような制約をたてたのであるが，every と異なって不定名詞句は主要語をもたない that 補文の場合にも外の要素よりも広い作用域をとることがある。

(13) a. *Every* senator told *several* newspapermen that *some* Cabinet

member was corrupt. (every>some>several)

=a. *Every* senator picked *some* Cabinet member and told *several* newspapermen that *that* Cabinet member was corrupt.

これも単一文内制約では説明できないものであるが，「特定性」ということに着目すれば，some Cabinet member は埋め込み文の主語であること，および some Cabinet member を取り挙げ，それを that で限定した形で新聞記者に伝えていることから several よりは some の方が特定化されていると見做すことができる。

さらに，動詞固有の意味内容が特定性に関与することがある。

(14) Ralph believes that Ortcutt is a spy.[9]

(14) は，Ralph が例えば (15) のように言ったにもかかわらず，(14) の話者は the man in the brown hat が Ortcutt であることを知っていて (14) のような表現をしたと考えることができる。この読みは透明な (transparent) 読みと呼ばれるものである。[9]

(15) Ralph said, "the man in the brown hat is a spy."

このような読みは，特定の動詞の補文内でおこる。したがって，このようなことから (16) が曖昧であることに異存はないと思われる。

(16) a. John believed that *someone* was at the door.
b. The FBI proved that *few* students were spies.
c. Melvin showed that *none of the formulas* were theorems.
d. John realized that *a picture* had been stolen.
e. I believed that *someone* insulted Arthur.

(16) e は，例えば，(17) のようにその曖昧性を示すことができる。

(17) i) I believed that there was someone who insulted Arthur.
ii) There was someone who I believed φ insulted Arthur.

(17) i) のような読みは，話者の信念（belief）の世界に属するもので，someone が個別的であることは間違いないが，特定的ではないので不透明な（opaque）読みとなる。他方，someone が believe の作用域内にない (17) ii) は話し手にとって特定の人であり，したがって，透明な読みとなる。以上のことから，that 補文内のQが広い作用域をもつのはそれが透明な読みをもつとき，ということができよう。そうすると，通例，疑問詞は特定の人物を問うているのであるから，(18) は透明な読みしかないことになる。(いずれも補文化子 that のないことにも注意されたい。)

(18) a. *Who* did John believe φ was at the door?
b. *Which picture* did John realize φ had been stolen?
c. *Who* did John say φ had left?

ところが，(19) のような疑問文は容認不可能である。これはどういうわけであろうか。

(19) a. **What* did Jones hiss that Smith like φ ?
b. **What* did Helen grieve φ had been experimented on?
c. **Which shuttlecocks* did John ask whether he had bought φ at Abercrombie's?

N. Erteschik-Shir (1977, 1979) によると，c を除き (19) の主文の動詞が優勢的（dominant）であるためにその補文内の要素を摘出できないということになると思われる。が，本稿では，当該動詞の意味内容が複雑（complex）であるため，その分，補文の中の要素である不定名詞句が不透明になるために摘出できない，という説明を与えることにする。疑問化された名詞句は，特定的名詞句で答えられる必要があるからである。(19) c は前節で扱った wh-島を形成する間接疑問文であるが whether 節に生起する

不定名詞句はその存在が前提とされておらず，したがって，不透明な名詞句ということになり，透明な読みを要求するwh-疑問詞と相容れず，そのため容認不可能な文となる。(19) a，b に生起している動詞が不透明な読みを要求するのは，(20) に示される通りである。用例は May (1977) による。

(20) a. John *hissed* that Smith liked *every* painting in the Metropolitan.

b. *Someone hissed* that Smith liked *every* painting in the museum.

=there is a person such that he hissed...

*≠for *each* painting in the museum, there is *someone* (or other) who hissed that...

c. *No* one *forgot* that *many* people had refused to contribute. (no>many)

d. *Everyone* asked whether he had bought *some* shuttlecocks at Abercrombie's. (every>some)

主文の叙述部が複雑になるのは，動詞固有の意味によるとは限らず，通常の動詞に副詞や否定が付加されてそうなる場合もある。その結果，それらの補文内にある不定名詞句は不透明となる。

(21) a. John did*n't* believe that *everyone* had left. (n't>every)

b. John said *loudly* that *everyone* had left. (loudly>every)

主文の動詞の意味量が豊かであるということは，情報構造に基づくとその部分が断定的 (assertive) になりやすいということであり，もしその補文が後続する時にはなんらかの意味で旧情報（照応的であること）を示すことになる。したがって，当該動詞が補文を伴うとき照応的であることを表す補文標識 that を要求する。感情を示す動詞もこの部類に属するが，揺れが観察される。

(22) (i) a. He resented *(that) she won.
(*(that)は that の省略は不可ということ)
b. He was sorry (that) she won.
(ii) I strongly believe *(that) this is a mistake.
(iii) a. He believed (that) she won.
b. He disbelieved ?*(that) she won.
(iv) a. I regret(= am sorry to say) that she will be present at the meeting. (ambiguous)
b. I regret (= am sorry about) the fact that she will be present at the meeting. (opaque only)
(v) a. I ONLY know that the house is on the 85th street. (But I don't know that number)
b. **What street* do you *only know* that the house is on ϕ ?

(22) (iv) の I regret は I am sorry to say と I am sorry about とで曖昧で前者の場合その補文は前提とされておらず，したがって，疑問の焦点になりやすいことになる。(23)のような例は以上のことから予測されるものである。

(23) a. *What* did Peter *regret* that she had given him ϕ ?
b. *What* did he *regret* that Paul did ϕ ?
c. Peter *regretted* *(that) he had given him the present.
d. ...and sometimes they bring books and pictures to show me, —delightfully green things—*family heirlooms* which I *regret* much that I cannot buy ϕ.
(L. Hearn, *From the Diary of English Teacher*)

前提とされる that 補文の要素を疑問詞として摘出する操作は，既知の了解事項を問うという点で矛盾を呈するが，ある要素を焦点として選び出す機能をもつ関係詞化ではかなり容認度が高くなる。このことは従来 wh-movement として疑問詞化と関係詞化を一律に扱ってきたことにかなり疑問を私が懐く由縁のひとつである。[10] 同じ joke という動詞に導かれる that 補文の要素を (24) a のように疑問詞化すると非文であるが (24) b のように関

係詞化すると容認度が高まる。

(24) a. **Who* did John joke that he'd never met φ?
b. This is *the man* whom John joked that he'd never met φ.

要するに，不透明な読みをもつ名詞句は疑問の対象になりにくいということである。複雑な意味量をもつ叙述語の補文に生ずる不定名詞句は，情報構造上そこに焦点が置かれず，したがって，不透明になりやすく，またそうであるからこそ特定の答えを要求する疑問文と相容れない，といえよう。あわせて，周知のことであるが叙実動詞 (factive verb) のように前提となっている要素が疑問の対象となりえない，ということも指摘しておかなければならない。

ちなみに，不透明な読みは，主語名詞句の内容や，前提を要求しない動詞の積み重ねられた埋込み文の不定名詞句にも与えられる。

(25) a. *John confirmed* that *every* investor was bankrupt. (ambiguous)
b. *The stock market crash confirmed* that *every* investor was bankrupt. (confirm>every: opaque)
(26) a. The Duke *realized* that John *believed* that *someone* was at the door. (ambiguous)
b. Archie *said* that the Duke *realized* that John *believed* that *someone* was at the door. (opaque)

2.2. 「単一文内制約」という観点からQの相対的作用域の問題を考察してきたが，無標の場合にはこの制約が有効であることは既に指摘した通りである。(27) (i) もこの方式で説明される。

(27) (i) a. *Everyone* ate *a* tomato. (ambiguous)
It was *a* tomato that *everyone* ate. (a>every)
(ii) a. It was tomatoes that *everyone* ate. (ambiguous)
b. =*Everyone* ate tomatoes. (ambiguous)

が，(27) (ii) が示すように，ゼロ複数の場合は，単数のときと異なり単一文内制約では予測できない。これは，ゼロ複数形が特定的読みをもちにくい，ということに関係しているものと思われる。

3.0. 以上，本稿では，作用域の問題をいわゆる島をなす文との関係において考察してきた。無標の読みとしては「単一文内制約」で予測可能である反面，これに違反する読みは，特定的解釈を与えるなんらかの要因が必要であることを指摘した。そして単一文内制約という観点からは，この後者の読みは有標であるが，「通例，広い作用域をとる名詞句は特定的である」という，より大きな一般化の立場にたてば予測可能な読みであることが結論として導かれたことになる。

注

本稿は，脱稿後に伊藤弘之教授からいろいろなご教示をいただいた。記して感謝する次第である。

1) この島という概念は，その中にある要素をその外へ関係詞化や疑問詞化，though 牽引，分裂文形成，話題化などにより摘出 (extract) できないこと——換言すると，島の内外にある当該要素を関係づけることができないという事実を説明するものである。

Chomsky (1972) などで提案されている下記の (iii)，(iv) のような上位範ちゅう優先の原則 (A-over-A Principle 以下 AOA) の不備を補うために，Ross (1967) が導入した島制約のひとつに複合名詞制約 (Complex NP Constraint 以下 CNPC) というものがある。次の (i) の容認可能性の差異は下記の (iii)，(iv) の AOA によっては説明できないものである。

(i) a. *Who did Mary hit the man who likes φ?

b. Who would you approve of [my seeing φ]$_{NP}$?

(*の印は英語において容認できない文であることを示す。以下この規約に従う。)

複合名詞句を，「その内部に S (文) を含む NP (名詞句)」と考えると，下記の CNPC (ii) によって (i)a を正しく排除し (i)b を容認可能なものにすることができる。(但し，(i)b の動名詞はその内部に S を含まないものとする。)

(ii) No transformation may extract a constituent from a complex NP.

(iii) In a structure of the form (iv), any rule that is formulated so as to apply to a constituent of type A must in fact apply to the highest A that meet the structural description:

(iv) $[\,[\quad]_X \quad [Z \;\; A \;\; W]_A \quad [\quad]_Y]_B$

((i) で A に相当するのは NP であることに注意されたい。)

CNPC のほかに，文主語制約 (Sentential Subject Constraint)，等位構造制約 (Coordinate Structure Constraint)，主語句制約 (Subject Phrase Condition)，NIC(Nominative Island Constraint) などの制約も島制約に該当する。さらに真の叙実動詞 (Factive Verb) の補文，ある種の動名詞句，定(definite)の絵画名詞句表現なども島を形成するものと思われるが，本稿では複合名詞 (CNP) を島制約の中心的構造と見做し議論をすすめる。

2) Rodman (1976: 168) および May (1977: 181)は 明瞭にこのことを次のように述べている。

(i)関係詞節において，関係詞化される要素は，常に当該関係詞節の他のどの要素よりも広い作用域をもつ。

3) この辺の考察については福沢 (1981) 参照のこと。

4) Chomsky (1977: 54-6) によると，次の (i)は every>a のひとつの読みだけが可能であるのに対し，(ii)は a>every の読みと every>a の読みとで曖昧である。

(i) John dates *every* woman who loves *a* fish. (every>a のみ)

(ii) *Every* woman loves *a* fish. (ambiguous)

5) 作用域の高い名詞句≠特定的名詞句の例として Ioup (1977) は以下のような例を挙げているが，私にはこれは特定の動詞や談話上のコンテクストを必要とする点で有標な例であると思われる。なお下付きの i, j は同一人物であることを示す。さらに，i) — iv) はいずれも a に後続するものとする。

a. *Everyone*$_i$ believes that *a witch*$_j$ blighted their mares.

i) If they$_i$ ever find out who she$_j$ is, they$_i$'ll try to catch her$_j$. (a>every)

ii) If they$_i$ ever find out who they$_j$ are, they$_i$'ll try to catch them$_j$. (every>a)

iii) they$_i$ know who she$_j$ is and they$_i$'re trying to catch her$_j$. (a>every)

iv) They$_i$ know who they$_j$ are and they$_i$'re trying to catch them$_j$. (every>a)

b. Harvey$_i$ courts *a* girl$_j$ at *every* convention. She$_j$ always comes to the banquet with him$_i$. (a>every)

c. *Most* boys$_i$ in this town are in love with *a* go-go dancer$_j$. Mary doesn't like her$_j$ at all. (a>most)

d. *Most* boys$_i$ in this town are in love with *a* go-go dancer$_j$. Mary doesn't like them$_i$ at all. (most>a)

a の i) は a>everyone$_j$ であるが，find out ということから she が誰である

かわかれば，というのだからこの時点で a witch は同定されていないことになり非特定的である。つまり，a witch の作用域は広いけれども特定的ではない例である。a の ii)は everyone>a の読みで a witch の作用域は狭く非特定的である。定代名詞で非特定名詞句が繰り返されているのは，a witch の正体が同定できたならば，という仮定に基づいており，依然として，ある種の限定化がなされているためと思われる。a の iii)は know という動詞の特質から a witch は特定的で，しかも a>every であることから she／her となっている。a の iv) では a witch は特定的であるが every>a のため they となっている。以上のことは，Q の相対的作用域が特定性ということと，一見，無関係であることを示唆するように思われるが，先に述べたように，私にはこれは無標の読みではないように思われる。b, c, d の例および次の例 e, f, g を考えてみればよい。

e. *Many* students in my class speak *two* languages. (many>two)

f. *Two* languages are spoken by many students in my class. (two>many)

g. . . . and I understand neither of *them.*

g の neither of them は特定的なので two languages が特定的である f に後続する時の g は容認可能であるが e では非特定的と解釈されやすいのでこれに g を後続させると容認度がおちる。b, c, d も前半部だけであると相対的作用域の曖昧性が観察されるが，後続する文によって曖昧でなくなっている。b は a>every, c は a>most, d は most>a であるが，いずれも作用域の広い方が特定的である。つまり，無標の場合に作用域の広い NP は特定的な読みをもつのである。なお，c の with a go-go dancer は動詞句に支配される PP と思われるが，広い作用域をとっている。これは VP-PP の Q は広い作用域をとらないという Reinhart(1976) の反例になるものと思われる。ちなみに S-PP は文に支配される PP のことである。

(i) *Someone* is riding a horse in *all* of Ben's pictures. (S-PP : ambiguous)

(ii) *Someone* found a scratch in *all* of Ben's pictures. (VP-PP : someone>all)

=There is *someone* such that he found a scratch in *all* of Ben's pictures.

6) Ioup (1975) では，Q の固有の内在的特性として，each>every>all>most>many>several>some (+NP) >a few の順に Q は広い作用域をもつ傾向があると述べられ，a(n) に関しては，every と all の間に入る場合があるが特異な面が観察されるという理由で表に明示されてない。二つの文に a(n) と他の Q がそれぞれ生起するとき，他の要因を同等にすると本文で述べたような理由から，a(n) はこの表の先頭にくるように思われる。

7) wh- 島制約に違反するのは，本稿におけるような語用論的意味論的 Q の作用域だけでなく移動規則の場合にも観察される。

(i) a. This is *the kind of weather* that there are many people who like ϕ. (N. Erteschik-Shir and S. Lappin 1979 : 58)

b. Then you look at what happens in languages that you know and *languages* that you have a friend who knows ϕ.

c. This is the one that Bob Wall was the only person who hadn't read ϕ.

d. Violence is *something* that there are many Americans who condone ϕ.

(McCawley 1981)

但し，これらの構文は (Have) 存在構文に導かれる関係詞節からの要素摘出であることに注意されたい。さらに，既に扱った wh-島の内部からの摘出を認める話者もいる。

(ii) a. *This book,* I am not sure whether or not I should read ϕ.

b. That book was written by John Anderson. *This book,* I don't know who has written ϕ.

c. This is *something* that I don't know what I should do about ϕ.

8) Q の相対的作用域の解釈が語用論的である点については，次の二つの文を比較されたい。

(i) *All* the women built *a suspension bridge.* (a>all)

(ii) *All* the women threaded *a needle.* (all>a)

(i) の all は〔+totality〕，(ii) は〔+individual〕の読みをもつ。これは，吊り橋のように大きなものは個人では造ることが困難で，他人の協力が必要であるということと，他方，針の目に糸を通すという仕事は，通例，複数の人間を必要としない，ことに起因するものと思われる。

9) (14) が (15) を根底にした読みであっても de re と呼ばれる読みになる。安井稔先生のご教示 (1982年8月27日) によると，de dicto は from what is said, de re は from the fact ということで，したがって de re は transparent として扱われることが多く，de dicto は opaque でまぎれを生じやすくなる，ということである。この曖昧性については主語の人称も関与する。(i)b は話者と主語が同一であるため a より読みがひとつ少ない。

(i) a. John wants to find *a woman.*

b. I want to find *a woman.*

(i) a には a woman が非特定的である読みと，主語 John にとっては特定的であるが話者には非特定的な読み，および主語にとっても話者にとっても特定的な読みの三つがある。理論的に可能である，話者にとっては特定的であるが主語にとっ

ては非特定的である読みは (i) a には存在しない。

問題となる不定名詞句の数も特定性に関与する。

(ii) a. *Everyone* read *a book* on caterpillars. (ambiguous)

b. *Everyone* read *books* on caterpillars. (everyone>ϕ_{pl})

c. *Everyone* read *sm* books on caterpillars. (ambiguous)

(*sm* は some の弱形であることを示す)

10) wh形を前置詞あるいはそれを含むより大きな名詞句と一諸に移動する，いわゆる先導規約 (pied piping) においても，疑問詞と関係詞で差異の生ずる例がある。J. R. Ross (1969) からの用例 (i) — (iii) でいわゆる Slucing 現象と呼ばれるものである。

(i) a. J. Edgar Hoover, *who* I have a picture of ϕ in my locket, is a cutie.

b. J. Edgar Hoover, *of whom* I have a picture ϕ ϕ in my locket, is a cutie.

c. J. Edgar Hoover, *a picture of whom* I have ϕ ϕ ϕ in my locket, is a cutie.

(ii) I know he has a picture of somebody, but I don't know

{ a. who
b. of whom
c. *a picture of whom } .

(iii) I don't know { a. who he has a picture of ϕ
b. of whom he has a picture ϕ ϕ
c. *a picture of whom he has ϕ ϕ ϕ } .

(iv) (v) は同じ動作主 (agent) を示す NP の摘出に関し，疑問詞と関係詞で容認度に差異の生ずる例である。

(iv) a. John read a novel by Dostoievsky.

b. *Who* did John read a novel by ϕ ?

(v) a. The book by the professor was turgid.

b. *The professor who the book by ϕ was turgid was unhappy.

References

Carlson, G. N. 1977. "A unified analysis of the English bare plural," *LPH* 1. 3. 413-57.

Chomsky, N. 1972. *Language and mind.* New York. Harcourt Brace Jovanovich.

_____. 1975. "Questions of form and interpretation," *LA* 1. 1. 75-107. Also available in N. Chomsky, 1977. *Essays on form and*

interpretation. 23-59. New York. Elsevier North-Holland, Inc.

_____. 1980. "On binding," *LI* 11. 1-46.

Culicover, P. W. 1976. *Syntax.* New York. Academic Press.

DeCarrico, J. S. 1980. "A counterproposal for opaque contexts," *LA* 6. 1. 1-20.

Donnellan, K. S. 1971. "Reference and definite description," in D. D. Steinberg and L. A. Jakobovits eds. *Semantics: an interdisciplinary reader in philosophy, linguistics and psychology.* 100-14. Cambridge Univ. Press.

Dresher, D. E. 1977. "Logical representations and linguistic theory," *LI* 8. 2. 351-78.

Erteschik-Shir, N. 1977. *On the nature of island constraints.* IULC.

_____ and S. Lappin. 1979. "Dominance and the functional explanation of island phenomena," *Theoretial Linguistics.* 6: 1. 41-86.

Farkas, D. 1981. "Quantifier scope and syntactic islands," *CLS* 17. 59-66.

Fiengo, R. and J. Higginbotham. 1981. "Opacity in NP," *LA* 7. 4. 395-421.

福沢 清 1981. 「数量詞の作用域について」安井 稔博士還暦記念論文集『現代の英語学』260-73. 開拓社.

Ioup, G. 1975. "Some universals for quantifier scope," in J. P. Kimball ed. *Syntax and semantics* 4. 37-58.

_____. 1977. "Specificity and the interpretation of quantifiers," *LPH* 1. 233-45.

Jackendoff, R. S. 1972. *Semantic interpretations in generative grammar.* Cambridge, Mass: MIT Press.

Kartunnen, L. 1976. "Discourse referents," *Syntax and semantics* 7 *Notes from the linguistic underground.* 363-85.

Kuno, S. 1971. "The position of locatives in existential sentences," *LI* 2. 333-78.

Liberman, M. 1974. "On conditioning the rule of subj. aux inversion," in *NELS* V. 77-91.

May, R. 1977. *The grammar of quantification.* Ph. D. dissertation, MIT.

村田 勇三郎 1982.『機能英文法』大修館.

中右 実 1977.「英語における不定名詞句と非制限的関係詞節」『文芸言語研究・言語篇』27-67. 筑波大学文芸・言語学系.

Peterson, P. L. 1975. "On the logical representation of specific noun phrases," in Proceedings of the 5th international congress of logic, methodology and philosophy of science. The British Library.

Postal, P. M. 1974. *On raising.* Cambridge, Mass. : MIT Press.

Reinhart, T. 1976. *The syntactic domain of anaphora.* Ph. D. dissertation. MIT.

Rochement, M. S. 1978. *A theory of stylistic rules in English.* Ph. D. dissertation. MIT.

Rodman, R. 1976. "Scope phenomena, 'Movement transformations,' and relative clauses," in B. Partee, ed. *Montague grammar.* 165—76. New York. Academic Press.

Ross, J. R. 1968. *Constraints on variables in syntax.* Ph. D. dissertation. MIT. IULC.

_____. 1969. "Guess who?" in R. I. Binnick et al. eds. *CLS* 5. 352-60.

Sjoblom, T. 1980. *Coordination.* Ph. D. dissertation. MIT.

Stillings, J. T. 1977. *Remarks on core grammar.* Ph. D. dissertation. MIT.